



人妻AVデビュー

子持ちの36歳ですが、頑張ります!!

原作 ももえもし
挿絵 すてりす

目次

4	— 人妻、AV女優になる
54	— 沸騰の感謝祭 前半戦
84	— 沸騰の感謝祭 後半戦
117	— それぞれの想い
153	— 人妻が頑張ってみました（前半）

第零話

人妻、
AV女優になる

『36歳です。仕事に興味があります』

物語は、SNSへと届いた一通のメールにより始まった。

ひろみね ゆうし

明らかな捨て垢のオフアーに訝しむも、結局と廣峯勇志は誠実な対応で相手を
出迎える。話を聞けば、送信者は結構な年上であり、更には現役の人妻だという。
人妻相手ではトラブルが多く、そもそも廣峯にはロリコンの嫌いがあり、年上に
興味を持った経験すら無い。案件を断ろうと何度も考えた末の、松浦紗友里との
出会いだった。

「あつ、もしもし。ユリです。い、いま到着しました……」

「峰岸です。もう隣に居ますよ」

「あつ……!! あはは……は、初めまして」

約束の日にて廣峯が初めて紗友里と出会う。既に廣峯は待ち合わせの場所にて
待機しており、その声に驚いた紗友里が思わずスマホを落としそうになる。

「え、と……早速ホテルでしょうか……？」

「いきなりで良いんですか？　僕としては、打ち解ける為にも、まず軽く食事を考えていました。メールでも、そう伝えていたと思います」

「あつ、そうでしたっ……ごめんなさい」

互いに偽名で自己紹介を交わす。落ち着いて話す廣峯とは対照的に、紗友里は緊張を極めて何度も口を噛む。異性との会話にすら慣れていない印象だった。

自分より7つも年上の、なんとも慌てた様子に、廣峯が一先ずホッと息を吐く。経験の豊富な廣峯でも、初めて会う女性には警戒心や不安が拭えず、それだけに紗友里の初々しい態度は、程良いアイスブレイクとなった。

また、想定よりも整った紗友里の容姿に廣峯が感嘆する。予め紗友里の写真はメールで送られていたものの、写りが悪くてス力を喰らっていたのだ。

（やっぱり、実際に会わないと分からないもんだな……）

しかし、実際の紗友里は顔立ちがきめ細かく、着痩せしながらも存在感を放つ乳房の膨らみや、僅かに赤み掛かった美しい髪など、写真だけでは分かり得ない魅力を多く備えていた。

三十代にも拘わらず垢が抜けない雰囲気も、廣峯の扇情を大いに煽る。廣峯の視線が何度も上下に揺れ動き、その度に紗友里が気恥ずかしそうに萎縮していた。

「好きな物を注文して構いませんよ」

「え、えつと……ごめんなさい。結構です」

「要りませんか？」

「正直に申しますと、不安ばかりで何も喉に通りません……」

「そうですか。大丈夫ですよ。じゃあ、自分だけ注文させて頂きますね」

「はい」

一行は、駅にあるカフェへと足を運んでいた。

これから二人は、ホテルで身体を重ねなければならない。明らかに性的経験の乏しい紗友里は、緊張と不安で食欲が湧かず、赤面を隠すように俯いてばかりだ。

空腹の廣峯は、そんな紗友里に構わず次々に軽食を頼んでいく。一息を吐くと、廣峯は本題を切り出した。

「ギヤラは十万円です。宜しいですか？」

「……はい」

「こちら契約書と誓約書になります。よく確認した後に、サインを下さい」

「分かりました」

「大丈夫ですか？ 顔が真っ赤ですけど……」

「うああ!? ご、ごめんなさいっ!!」

「い、いや、謝らなくて全然良いですけど」

「うう……」

「あの、一つ聞いても良いでしょうか？」

「な、なんででしょうか!？」

「どうしてユリさんはA Vに出演する気になったんですか？ 失礼ですが、全然そういうタイプには見えません。ユリさんのような淑やかな女性からオフアーが来た時はビックリしましたよ」

「……………」

水耕栽培に携わる廣峯勇志は、副業としてA V制作を営んでいた。

A Vと言ってもメーカーに勤める訳では無く、個人によるインディーズである。素人との行為を撮影しては、それにモザイク等の編集を行い、サイトで販売する。大体の相手は、素人と言えどアダルトを生業とする者であり、こうした仕事にも抵抗が無い女性ばかりだ。

しかし、明らかに紗友里は違う。異性への耐性は無く、そもそもが人妻である。話から察するに、旦那には確実に秘密にしていたの、今日という仕事だった。

アダルトに初心者な上に、旦那には内緒の人妻と来れば、理由は一つしかない。察しは付くものの、廣峯は紗友里の言葉を待った。



「実は、借金があるんです。夫には絶対に知られたくなくて……」

「そうでしたか、すみません。話さなくて大丈夫ですよ」

「ありがとうございます」

紗友里の指先は震えていた。

感情を必死に押し殺すように、声も上擦っている。業界とは無縁の人妻が急にアダルト産業へと首を突っ込んだのだ。借金で精神的に追い詰められた末ならば、紗友里の震えも必然だった。

借金か脅迫か、その辺りを予想していた廣峯に驚きはない。優しい言葉と共に、紗友里の手を握って慰める。この仕事をしていれば、訳アリな女性との出会いも多い。いまにも不安で事切れそうな紗友里に、これでもかと廣峯が慎重に接する。物柔らかい廣峯に、紗友里は初めて笑顔を見せた。

「優しいんですね」

「普通ですよ。どんな僕を想像していたんですか……」

「アダルト関係の仕事には、もっと物騒なイメージがありました」

「なのに、よく来てくれましたね」

「今日の約束を取り付けた時は何度も後悔しました。今朝も後悔で泣いちゃって。だから、峰岸さんが優しい人で本当に良かったです。本当に、本当に……」

紗友里の借金は、完全に私的な理由による破産だった。

専業主婦として暮らす傍らに、趣味の買い物が高じた結果である。その内気な性格から、旦那や家族にも破産を打ち明けられず、一人でカードの請求に怯える日々を送っていた。

そして廣峯がSNSで発信した「高額バイト」のハッシュタグに引っ掛かった次第である。初対面の男と性行為を行い、マスクの着用が可能とは言え、更には撮影もされる不安に、紗友里のストレスは限界に達していた。

そんな現況での温もりは有難く、紗友里の瞼には涙を浮かべていた。

「それでは、そろそろ行きましようか」

「は、はい。ホテル……ですよね？」

「勿論です」

「……ッ!!」

最後のパンケーキを口に放り込んだ廣峯が言う。時刻は、間もなく夕方に差し掛かっている。旦那にはママ友との飲み会だと伝えており、夜間は丸々と廣峯に費やす予定である。紗友里にとっては仕事でも、旦那から見れば不倫でしかない。旦那ではない異性と肩を並べてホテルへと向かう紗友里は、チクチクと罪悪感を感じながら、不安と緊張で心臓を高鳴らせていた。

「ふわ……広くて綺麗なお部屋ですね」

「もしかして、ラブホテルは初めてですか？」

「え、あ、は、はい。恥ずかしながら……」

「ラブホの中じゃランクは下の方ですよ。料金も三千円ですしね。寧ろ謝ろうと思っていたくらいです。撮影の条件が整ってるってだけで選びましたから」

「そ、そうだったんですね」

「とりあえず荷物を下ろしましょう」

「は、はい」

チェックインしてから、どうも紗友里が落ち着かない。生まれて初めてのラブホテルに感銘を受けており、キヨロキヨロと彼方此方を眺めている。アダルトな知識はまるで薄いらしく、それは経験の程度も示していた。

「な、なんででしょう？」

「……いえ、では準備しますね」

気付けば、廣峯が紗友里をチラ見している。間もなく四十代を迎える人妻とは思えない美しさが有り、年上を食わず嫌いしていた廣峯も、つい喉を鳴らす程だ。それだけに経験が薄いとは珍しく、廣峯はギャップ萌えを感じていた。

「シャワーから撮影で良いですか？」

「は、はい。分かりましたっ」

「あ、それより先に、お金の方を渡しておきますね」

「あ、ありがとうございますっ!!」

バッグから取り出した一通の封筒を渡す。逸る想いを漏らしながら、紗友里が中身を確認める。僅かに厚い封筒には、十枚もの一万円紙幣が連なっていた。

紗友里が安堵の息を零す。食事の時点で廣峯への信用はあったものの、実際に現金を手渡されるまで不安で一杯だったのだ。

契約書にサインを行い、封筒を大事に仕舞うと、いよいよ行為の始まりとなる。廣峯がビデオカメラを取り出すと、遂にという現実が紗友里を蝕み出す。心臓の高鳴りは最高潮へと達しており、顔面も急激に赤みを帯びていった。

また、想像より遥かに若い美男子の廣峯に、緊張とは別のドキドキを紗友里は感じていた。この段階から既に、紗友里の内心では学生以来の「久しい感情」がポカポカと萌芽しつつあったのだ。

「まずはシャワーシーンを撮ります」

「マ、マスクは着けても良いんですね？」

「出来れば、シャワーではマスクはしないで欲しいのですが……」

「で、でも、それじゃあ顔が見えちゃう……」

「後ろ姿だけ撮影しますので」

「それなら……ありがとうございます。無理を言ってごめんなさい」

「いえ、シャワーシーンはオープニングで軽く使う程度なので問題ないです」

インディーズでは、マスクを付けた出演者が多い。プロの女優ではない以上は、A V出演への抵抗も当然である。顔出しをして知り合いに認知される不安もあり、そうした場合にはマスクという提案があった。

マスクを付けるメリットは多い。顔が半分も隠れる為に、女優側には安心感が与えられる。また、マスク美人という言葉があるように、マスクを付けることで出演者の水準を一定より下回らない効果もあった。

最初は不安に思っていた廣峯も、試しに女優にマスクを付けさせて撮影すると、ユーザーから「より可愛い」というコメントを多く頂いていた。

マスクの着用で出演料を減額させる点もある。一円でも多く稼ぎたい紗友里も、素顔の披露には抵抗があり、出演料を30%カットされてもマスクを望んでいた。

「う、後ろ姿だけですよ……？」

「勿論です。では、脱いでください」

「あ、ううっ……」

ビデオカメラを手に、紗友里に脱衣を促す。当然ながら、カメラを向けられた状態での脱衣は初めてである。そもそも、初対面で脱ぐ行為から、既に紗友里のキャパシティは限界なのだ。

震える指先で一枚一枚と服を床に落としていく。まずはシャツを脱ぎ、続いて黒いデニムが下ろされると、清楚感が漂う純白の下着が露わとなった。

レースのブラジャー、パンツである。これが人付き合いが少ない紗友里による、精一杯のセクシー演出なんだな……と、廣峯は感じた。

インディーズでは素人性を求められる為に、このように慎ましくありながらのセクシー系がコンセプトにマッチしている。口にはしなかったものの、紗友里のポテンシャルや素人感に、廣峯は心から悦んでいた。

「白なんですね。清楚感あって良いです」

「うあ……は、恥ずかしいです」

「顔が真っ赤ですよ」

「そ、そんなことないですっ……」

「あ、行為中は敬語を抜いて貰って良いですか？ 年上感を出したいので」

「わ、分かり……分かった」

「ありがとうございます。では、服を……」

「は、はい……」

想像の通り、紗友里は着痩せするタイプらしく、素肌を晒して初めて肉付きの良さが顕著となる。くつきりと映えるブラジャーのラインから、零れそうな程にぷりぷりした臀部や、運動をしない専業主婦らしい太めのボディなど、AVでは有り得ない人妻のリアリティが窺えた。

モデル系ばかりを相手にしていた廣峯も、股間をビクビクと反応させる。

（三十代後半なんて絶対に売れないだろうなと思ってたけど、これは割と需要がありそうだな。気が進まない撮影だったけど、これなら来て正解だったな）

紛れもなく年下を好む廣峯は、今回の撮影には全く気乗りしていなかった。

紗友里の歳を聞いて写真を見た時は、何度も断ろうとも考えていた。

廣峯にとって年上は許容範囲外なのだ。

それなのに、わざわざ紗友里のオフアーを受け入れた理由は、多くのファンが人妻モノを希望していた由縁である。人妻系は人気があると廣峯も理解しており、一度くらいは……という思いで今日に至っていた。

期待せずに臨んだ今日であるも、紗友里が赤裸々になるに連れて廣峯の食わず嫌いが払拭されていく。

それどころか、見る見る紗友里に惹かれている自分が居る。後に、廣峯が人妻専門のマニアとなる片鱗だった。

「綺麗です。ユリさん」

「ふ、太ってるから、マジマジと見ないで下さい……」

「魅力的ですよ。隠さないで下さい。ずっと、そうしてるつもりですか？」

「うっ、ううっ……」

そして全ての脱衣が終了する。己の身体がコンプレックスな紗友里は、両手で乳房と股間を覆い、頑なに秘部を見せまいとしている。確かに紗友里の肉付きはふくよかであり、女性としては好ましくない体型だった。

しかし、廣峯を始めとした男性には、強い魅力を感じてしまう。悪戯心もあり、廣峯は、羞恥プレイとも言えるべき指示を紗友里に出していく。

「手は後ろに組んで」

「は、はい……」

「おっぱい大きいですね。そのまま後ろ向いて下さい」

「……………」

「お尻も最高ですねえ。思わず涎が出ちゃいそうです」

「絶対に、そんなことないですからっ……」

「次は、指で割れ目を広げてみて下さい」

「え、えええっ!? む、無理っ、無理ですう……」

「慣れていかないと駄目ですよ」

「こ、此処もビデオ撮影するんですか？」

「オマ○コにはモザイクが入るから安心して下さい」

「よ、良かった……」

「そういえば、敬語に戻っちゃってますよ」

「あっ、ご、ごめんなさい」

「本番中では、ちゃんとお願ひしますよ？」

「は……う、うんっ」

「じゃあ、アソコをよく見せて下さい。凄い毛量ですね……」

「……………ッ!!」

熟れた女の窪みは、鬱蒼と茂る陰毛の奥底に在った。

撮影に対するムダ毛の処理を怠り、陰部は束子のように剛毛である。土壇場で悔いる紗友里は、恥を極めて中々にその手を退けようとはしなかった。

いつまでもは逆らえず、ゆつくりと開帳されていく。茂みを掻き分けなければ、その奥が全く窺えない程に陰毛が生い茂る。カメラを片手に、実況しながら膣を探索される行為に、いまにも紗友里は恥ずかしさに泣きだしそうだった。

「ど、どうして……綺麗になかったんだろう……うっ、うううっ!!」

「とても良いですよ。生活感があつて、余計に興奮します」

「絶対につ、それは変つ……!!」

「凄く綺麗です。僕はクンニとか嫌いなんですけど、ユリさんのなら舐められるかも。臭いも悪くないし……もしかしたら、ユリさんって凄い逸材なのかも……いまから楽しみです」

「ううううっ、恥ずかしい、恥ずかしいっ……!!」

「もつと見ていたいけど、そろそろシャワーに行きましようか」

「う、うん……」

絞り出たような声だった。

赤面は言うに及ばず、全身が羞恥で紅潮していた。

異性に慣れてないとはいえ、あまりにも耐性の無い紗友里に、廣峯の嗜虐心が止まらない。恥ずかしがりながらも、命令に従ってくれる所が堪らず、つついエスカレートが止まらなかった。

欲を抑えて二人でシャワー室へと向かう。映像のオープニング用にシャワーのシーンを撮影すると言い、まずは紗友里に身体を洗い流すよう指示した。

「いつも家でやっている通りで良いですよ」

「ん……」

「良いお尻です。顔は映さないのでおっぱいも見せて下さい」

「うううう……」

覚束ない手付きの紗友里を、食い入るように背後から撮影する。

腰のくびれや臀部の肉感が重要であり、そこへと重点的にカメラが忍び寄る。

本人の希望により顔を映せないものの、廣峯には紗友里の表情が手に取るように分かっていった。

背後に感じる廣峯の存在に、紗友里は顔を綻ばせていた。

もはや不安や罪悪感はない。あるのは、緊張と羞恥と、それから女の顔だった。

「よし、こんなものかな」

「も、もう良い？」

「はい、ありがとうございます。続いて洗いっこをしましょうか」

「えっ!? あ、洗いっこ!？」

カメラを脚立に設置して廣峯が脱ぐ。最初の行為は、シャワー室で行われた。

あらゆる角度から撮影すると、続いて廣峯が個人的に好む「洗いっこ」を行う。デリバリーヘルスでは有り勝ちな、情事の前に互いで身体を洗い流す行為である。カメラを手放して服を脱ぐと、廣峯は反り立つ陰茎を紗友里へと宛がった。

亀頭を臀部に擦り付けては、抱き締めるように両腕を紗友里の腹部へと回す。カチカチに硬くなつた陰茎の感触に、紗友里の女の声が漏れる。

「ひやあっ!？」

「ユリさんを見ていたら、我慢が出来なくなりました」

「そんな……こ、こんな所でっ!？」

「よくあることですよ」

「うっ、あ、当たってますよ、峰岸さんっ……!!」

「当ててるんですよ。どうですか？ 久々でしょう？ 旦那さん以外の男の人と、こうして全裸で抱き合うなんてさ。嫌じゃ無ければ良いんですけど」

「な、何年振りか分かりません……少なくとも、主人以外とは初めてです……」
「え、そうなんですか!?　ということは、ユリさんの経験人数は一人だけ?」

「……………」

紗友里が静かに、ゆっくりと頷く。これには廣峯も呆気に取られた。

経験が乏しいとは思っていたものの、流石に経験人数が一人とは予想が付かず、苦笑いが自然と漏れる。同時に、廣峯の滾りが増していく。男を知らない年上の人妻を自分の色に染めたいと、そんな願望が籠められたように、ペニスが激しくうねっていた。

「エッチは不慣れでしたか」

「……ん」

「本当に、それでよく僕に声を掛けてきましたね」

「ど、どうしても夫にはバレたくなくて……お金に困っていますから……」

「それでAVに出演しようだなんて可愛すぎますよ」

「か、可愛い!？」

「ユリさんには、幸せになって頂きたいです」

「ありがとうございます……」

「僕が絶対に幸せにします」

「そ、そんな、主人でも無いのにっ……んんっ、ふうっ……」

ムードを高める為に、廣峯は行為の最中でも口数を絶やさない。

だが、この幸せにしたいという言葉は、紛れもない廣峯の本心だった。

プロポーズのような文言に紗友里が戸惑うも、廣峯が言う幸せとは、飽くまで快感についてだ。この哀れな人妻を、滅茶苦茶に犯したい……その一心で廣峯は牙を剥いていた。

「こうして僕に抱き着かれて……不快じゃないですか？」

「……」

「正直に言って良いですよ。ユリさんの本音も気になるので」

「不快……じゃないです。思ったよりも……」

「凄く嬉しいです。ちなみに僕は、ユリさんと密着して幸せです」

「ふえっ!? う、うううっ、と、年上を揶揄わないでよっ……」

「本心ですよ。凄く魅力的だから、すぐに好きになっちゃいました」

「ふああっ、や、止めて……そう言う言葉は……」

「嫌ですか？」

「……」

「拒絶しない限りは、僕もグイグイ行きますからね」

「んっ、んんんっ……んっ……!!」

「声を我慢する必要はありませんよ？」

「は、恥ずかしい、から……」

「本当に経験が少ないんですね。声くらいで……なら、無理やり出させますよ」

「んっ!? ひあっ……んああっ……!!」

「乳首がコリコリしてますね」

「んんんっ!!」

背後から密着しての、乳首弄りが始まる。張り詰めたペニスを紗友里の臀部で擦りながら、器用に両手で乳房を操っている。人妻の肉感や豊かな乳房の味わい、臀部の感触に、廣峯は早速と酔い痴れていた。

また、紗友里も官能を露わとしている。漏れる嬌声を必死に押し殺していた。そこに廣峯の怒涛が続く。右手で抱き抱えながら、左手でシャワーのノズルを持ってくると、出力を上げて湯を噴出させる。

それを茫然と眺める紗友里に、廣峯はノズルを股間へと宛がった。

「ひゃあああっ!! な、なにをつ!!」

「気持ち良いでしょう? まあ、よくあるシャワー愛撫ですよ」

「そ、そんなの、無いですよ……」

「有名なのに。というか、また敬語に戻ってますよ。もう別に良いか……」

「ううっ、シャワーは止めて下さい。じ、自分で綺麗にしますから……」

「別に、洗う為にやってる訳じゃないですよ。ほら、手を退けて下さい」

「んんんんっ、く、擦りたい、です」

右手で乳房、左手でノズルを操り、それぞれが性感帯を刺激していく。廣峯の明確な好意もあり、紗友里は心身ともに穏やかでは無かった。

初めて味わうシャワーの感触に、こそばゆい感覚を味わいながらも、身体中がビクビクと快感を萌芽させている。ジワジワと官能が昂り、次第に声だけでなく、身体の反応も止められなかった。

「はあ……良い匂いですね、ユリさん」

「ふあ、か、髪の毛の匂い……嗅がれると恥ずかしいですっ……」

「おっぱいも大きいし感度も最高。これで男の経験が一人だけなんて信じ難い」

「本当の……ことですっ、んっ……」

「声……我慢しない方が気持ち良いですよ」

「恥ずかしい……」

「力まないで落ち着いて……せつなくなんだから、エッチを楽しみましょう？」

「エッチを楽しむ……そんなこと……考えたことない……」

「……本当に慣れてないんですね」

「恥ずかしながら……」

「これはプレッシャーですね。ユリさんを満足させたくて仕方ありません」

「お、お願いします」

「キスして良いですか？」

「……はい」

「キスの経験は？」

「主人とだけ……」

「最高です」

「んっ、ちゅっ、んっ、んんっ……」

「ああっ、紗友里さんっ、最高です。唇が柔らかくて……気持ち良いです……」

シャワーを宛がいがながらも、紗友里を横に振り向かせてキスへと馳せる。唇をゆつくりと重ねて紗友里の弾力を堪能する。口付けの経験も皆無と言い、廣峯の高揚も止まらなかった。

紗友里の旦那は、紗友里よりも気が弱い年上の男性であり、自分から性行為を強請ることも無いという。紗友里も自ら率先して誘うタイプではなく、気付けば十年以上もセックスレスという現状だった。

よってキスも十年振りとなる。久々に味わう口付けの味は、紗友里にとっても至高の美味である。また、決して口外の出来ない想いとして、廣峯との口付けは、これまでに感じた経験のない心地良さを味わっていた。

「唇柔らかくて気持ち良いです」

「こ、こんなに長くキスしたことない、です……」

「本当ですか？ 次は、舌を絡めましょう」

「し、舌も、か、絡めたことない、です……」

「ええっ!? 随分と無欲な旦那さんなんですネ」

「……………」

「すいません。気に障りましたか？」

「い、いえ」

「良かった。じゃあ、ユリさんの初デープキス……僕に下さい」

「うううっ……え、えっと……こ、こう、ですか？」

「んっ、舌が長いんですね。んっ、ユリさん何処まで完璧なんですかつ」

「はっ、んんっ……み、峰岸さんっ、唾がいっぱい……」

「嗜好です。ユリさんの唾も欲しいです」

「はうんっ、んふっ、んっ、ぢゅるっ、ぬちゅっ、くちゅっ……」

「んっ、ぢゅっ、ぬちゅっ……」

「んんんんっ、はあ、はあ……ふああああああんっ!!」

全裸で身体を擦り付け合い、密着しては何度も唾液を交換する。キスの最中に、紗友里の身体は度々に痙攣していた。

臨界点に達したのである。ビクンビクンと紗友里の身体が打ち震えて止まない。一々感じる自分が恥ずかしくなり、なんとか反応を抑えようと努力するも意味が無い。目覚ましい快感に、紗友里は声にもならない哮りを止められず……全身が感動に打ち震えていた。

「あっ、あああっ、あっ、あああっ……」

「もしかしてイキました？」

「……………ッ」

「可愛いですよ」

「はあ、はあ……はあ………恥ずかしい……」

「こんなに可愛くて魅力的な人妻は初めてです。僕も、イキそうですよ」

「うううっ、そ、そういうこと、ナチュラルに言わないで下さいよお……」

「照れてるんですか？」

「あ、当たり前ですっ」

褒められ慣れていない紗友里は、廣峯の一言一句にドギマギして顔も真っ赤だ。心臓の高鳴りが抑えられず、湯気が出る程に赤面している。目も合わせられず、プイツとそっぽを向くと、廣峯が今度は首筋へのキスを始めた。

「ふあああああ……」

「匂いも良い……ちゅっ、最高です……可愛い、可愛いです、ユリさん……」

「あああああっ、と、年上を……そんな、褒め殺ししないでよおおっ……」

「褒め殺しだなんて。美しい女性には、とことん敬意を表したいだけですよ」

「ううっ……峰岸、さんっ……あっ、あああっ、首筋をキスされてるだけなのに、あああっ、お、小股が疼きます……んんっ、き、気持ち良いっ……」

「……この続きは、ベッドでやりませんか？」

「はあ、はあ……は、はひ……」

「ユリさんのこと、もっと気持ち良くさせたいです」

「んん……こ、これ以上されたら、変になっちゃいそう……」

実は廣峯も絶頂の手前だった。

こんな所での射精は勿体ないと悟り、さり気なく紗友里を次のステージに促す。ベッドへと誘い、漸くと本格的な撮影が始まる。不安を抱きながらも、紗友里は胸には複雑な感情が芽生えていた。

四

紗友里の旦那は、お世辞にも性行為が得意とは言えなかった。

有り体に言えば、あまりにも拙劣である。悲観的な性格の旦那は、自ら情事を紗友里に求めることが無ければ、下手と思われるが為に、敢えてその道を通らないように心掛けている程の臆病者だった。

紗友里以外の女性と交際した経験も無く、紗友里が結婚で処女を失ったように、旦那も同じく結婚するまで童貞を貫いている。子作り以外の目的ではセックスの経験が無く、これでは性的な技術が皆無なのも必然と言えた。

よって紗友里の性遍歴には、快楽という概念が存在しない。稚拙なセックスを経験したのみであり、性的な行為に特筆した抒情など一片も有り得なかった。

それ故に、シャワー室でのオーガズムには戸惑うばかりである。

（全身が熱い。脳みそも、なんだか蕩けてるような感じ……これがエッチなんだ。凄い。凄い……頭がボーっとしちゃう……）

経験人数は、ゆうに百人を超える廣峯である。処女にも等しい感度の紗友里を愉悦に墮とすくらい造作もない。僅かなやり取りの中で廣峯も、紗友里が如何に快感への耐性が無いのか察知している。

だからこそ、じっくり責めたいという欲望に駆られた。

「此処からは、マスクしましょうか」

「あつ……ありがとうございます」

漸くと正面からの撮影に入る。素人感を売りにしたインディーズでは、専用の機材を使わずに、スマホだけで映像を作る者も居る。廣峯も、それなりに安価なビデオカメラに、安物のリングライトを使う程度だった。

脚立に乗せたビデオカメラと、低刺激性なリングライトを紗友里へと向けると、いよいよ本番である。正面にはマスクを付けた紗友里が全裸で佇む。不安そうな瞳を廣峯に向けながら、そわそわしていた。

「マスク姿も可愛いですね」

「ありがとうございます……」

「マスク女子って好きなんですよ。そのままキスしたくなるくらい」

「ええっ!？」

「まあ、それはさておき……なにか希望のエッチはありますか？」

「特には……そもそも、あまりよく知らないので……」

「正直なんですネ」

「嘘を吐いても仕方ないです」

「嬉しいです。極力優しくやります。痛かったりしたら、言って下さいね」

「ありがとうございます」

ベッドに佇む紗友里は、まるで怯える小動物のように落ち着かない。相對して廣峯もベッドの上に座ると、その豊満な乳房へと両手を伸ばす。シャワー室では落ち着いて味わえなかった、二つの弾力を確かめように貪る。軽く触れるだけで紗友里の身体が僅かに反応を示した。

そこから、優しく揉みしだく。手のひら一杯に収まるサイズの乳房は、感触もまた格別だった。

「柔らかい……」

「んっ、んんっ、ふう、ふう……」

「おっぱいだけで感じられるんですね」

「こ、こんなに揉まれたこと……無いですから……」

「嘘でしょ!? 貴女のご主人は、真正の無欲なんですネ」

「……………」

「脚……開いて下さい」

「……………ッ!!」

「大丈夫。マスクしてるし、秘部はモザイク処理されますから」

「は、はい……」

「ありがとうございます」

羞恥に塗れながら、ゆっくりと紗友里が開脚を行う。ベッドの上でM字に脚を開いて秘部を露わとする。躊躇う姿が愛らしいと思いつつも、さっさと見せろと言わんばかりに廣峯が「巻き」のポーズを取る。手入れが全く行き届いていない紗友里の局部は、モザイクを入れる余地も無い陰毛の樹海だった。

「それにしても、毛が多いですね。いままで観た中で断トツかもしれない」

「うううっ、恥ずかしいっ、ごめんなさい、ごめんなさい、こんな……」

「いえいえ、凄く興奮しますよ？」

「え、ええっ、毛が多いと興奮を……!？」

「そう言われると変態っぽく聞こえますが、まあ否定はしません」

「……………」

「引かないでよ。ユリさんだって濡れてませんか？ 僕に視られてるだけで」

「そ、そんなことっ!？」

欲情を指摘された紗友里が思わず脚を閉じようとする。

だが、既に両足は廣峯に捉われており、身動きが取れずに下腹部を隠すことも叶わない。眼前にはビデオカメラがある。マスクによる息苦しさもあり、まるで紗友里は興奮が抑えられないようだった。

マスクをしても明らかな赤面に、肩での息遣いが露骨である。

「はあ、はあ、はあ……はあ、はあ、はあ……」

「ハアハア言ってますね。興奮してるんですか？」

「ち、違う……あ、暑いから……」

「とか言って割とオマ○コ濡れ濡れですよ。でもこれは、さっきの余韻かな？」

「うううっ……あああつ、そ、そんなに顔を近づけないで……!!」

草々を掻き分けた先には、紗友里の秘境が広がっていた。

三十代後半にして処女にも等しい人妻のヴァギナである。使い古された局部を見慣れた廣峯なら一目瞭然の、鮮度に満ちた瑞々しいフレッシュマ○コだった。

鼻を近付けて臭いを嗅ぐ。シャワーの直後もあり、鼻を刺すような悪臭は無い。心の中で一先ずホッとする、廣峯は言葉攻めを続けた。

「やっぱり、視られて興奮してますね」

「そんな、私……み、視られているだけで興奮しちゃうなんて……」

「別に、全然変な話じゃないですからね？　そういう風俗もあるくらいです」
「そ、そう、ですか……あ、あの、息が……ソコに掛かってっ、んんっ……」

「気持ち良いんですか？　息が触れるくらいで……敏感ですねえ」

「ううっ……き、気持ち、良い、です……」

「素直で可愛らしいです」

本格的な行為へと入る前に、乳房や股間等の部位をビデオに収める必要がある。さり気なく位置取りを熟せる廣峯には、素人の紗友里も内心で感心していた。

同時に、性の奥深さを思い知る。シャワーでのオーガズムを始めに、こうした前戯にも成らない愛撫だけでも、これ程の快感を得られるのだと――

「はあ、はあ……んっ……」

「我慢しないで……気持ち良い時は、それを声に出した方が良いですよ」

「はい……ふあっ、ああっ、み、峰岸さんが喋る度につ、股間がっ……」

「吐息だけで感じて……セックスの反応が、いまから楽しみですよ」

「……………ッ!!」

視られる興奮や、異性の吐息を秘部で味わう感覚に、紗友里が淡い快感を零す。感情を隠し続けるタイプではなく、なにか吹っ切れたらしい紗友里は、素直にも有り体の想いを口にしていた。

紗友里の腰が僅かに持ち上がる。M字の下半身を廣峯に押し付けるようにして、両腕で全身を支える体勢へと変えている。廣峯の息を、より濃厚に味わいたいと女性器を近付けているのだ。

清楚な人妻の、快楽に堕ちた瞬間だと言って良い。理性の限界を悟った廣峯は、内心で小さく笑みを零すと、ぎりぎりまで割れ目へと口元を寄せて言った。

「もう舐めても良いですか？」

「え、ええっ!？」

「まさかクンニされたことも無いんですか？」

「……………」

紗友里が黙りこくるも、反応に疑いは無かった。

セックスに疎い紗友里の旦那に、廣峯は感謝しつつも呆れたように嘲笑する。

紗友里という逸材は、そうは存在していない。

それなのに、旦那の功績が処女を奪った程度とは、ただただ情けないと哀れを感じていた。

「気持ち良いセックスをする為にも、女性には前戯が必要なんですよ。もう既にユリさんは濡れ濡れですけど、別にもっと濡らしたって構わないでしょう。んで、効果的な前戯がクンニなんです」

「クン……ニ……」

「此処を舐めるプレイですよ」

「ふああああっ!？」

「それすら知らないとはね。ユリさんの旦那さんは、前戯もやらずに、イキナリセックスしてたんですか？」

「……………」

「いや、それは聞いて良い話じゃないですね。とにかく、やれば更に気持ち良くなれます。どうですか？ 舐めて欲しいですか……？」

「ううっ、こ、こんな場所を舐める、って……」

端から見れば、割れ目と話してるように見える。

M字に開いた下腹部に首を突っ込みながら、紗友里に性の追求を促している。

廣峯の誘惑に、葛藤した様子を見せる紗友里であるも、とうに心の方は決めていた。

「な、舐めて……下さい……」

紗友里には、いままで内心で引っ掛かり続けていた疑問がある。

『実は、主人はエッチが壊滅的に下手なのでは？』

という疑問だ。

情事に快楽が付き物な点は、どれだけ性に疎い紗友里でも理解している。なのに、これまでの性生活で快感を覚えた試しがない。

旦那の情事には前戯が無く、唐突なセックスは痛いばかりである。

『恐らく、それが現実なのだ』と思い込んでいた紗友里の偏見が払拭されていく。引っ掛かるというよりも、ほぼ確信していたと言っても良かった。

しかし、これを認めたら、主人に対する印象が変わるかもしれない……という不安があり、ネットで知識を仕入れることもせず、敢えて紗友里はこの事実から目を逸らし続けていたのだ。

（だからって主人に失望しては駄目よね。あの人の、ああいった不器用な性格が気に入ってるんだから。これは、仕事……ちゃんと割り切らなきゃ……ちゃんと割り切れるからこそ、此处では気持ち良くなっても、良いよね……？）

「……………私を……気持ち良くして頂けますか？」

「勿論です。思いつき気持ち良くさせます」

「あ、ありがとうございます……」

「感度の良いユリさんなら、きつとご満足頂けることでしょう」

主人への不安を余所に、紗友里が初めて性へと積極的になった瞬間である。

そして、紗友里が後に一途を辿る切っ掛けでもあった。

「ああああっ、あああっ、あ、熱いつ、熱い舌がっ……柔らかくてえっ!!」

「ぺちやぺちやっ、ぬちゅっ、くちゅくちゅっ、ぺろっ……」

「待ってっ、なにこれっ、峰岸さんの舌で……全身溶けちゃいそうっ……」

「全身が力んでますよ。もつと落ち着いて……」

「あああああっ……」

食いしばった歯の隙間から、紗友里の嬌声が漏れている。初めて味わう啜陰に、紗友里のキャパシティが早々に限界を迎える。半ばパニックに陥りながら、天を見上げて固く目を瞑り、全身で感情を表現していた。

廣峯は、まずは様子見とばかりに、陰核の周りを責めている。円を描くようにＵスポットを穿っては、時折りバキュームを織り交ぜている。毛量が多く、すぐ舌に陰毛が絡むも、廣峯に不快感は無かった。

やがてＵスポットばかりではなく、クリトリスにも触手を伸ばし始める。

「ひぎいっ、あああっ、はっ、はっ、はっ……」

「んちゅっ、んっ……マスク苦しそうですね。大丈夫ですか？」

「はっ、はい……ちよつと、苦しい……けど、だ、大丈夫です……んっ!!」

「マスクを取っちゃっても良いんですよ？」

「そ、それ、は……」

「まあ、辛かったら言って下さいね」

「はあっ、はあ、はあ、はあっ、あああっ、はあっ……あああああっ!!」

「くちゅくちゅっ、んちゅっ、くちゅっ、ぴちやつ、ねちや……」

「ふああああああっ!!」

廣峯による怒涛の責めに、シュコシュコと紗友里のマスクが膨縮を繰り返す。的確に敏感な箇所を突かれては叫びが止まらない。顔は真っ赤に染まり、呼吸が苦しそうなのは明らかだ。

それでも顔出しはNGであり、なんとか堪えようと奮起する。だが体力は既に尽き掛けており、加えて廣峯の愛撫も徐々に強さが増している。もはや紗友里は酸欠する寸前だった。

（なにこれ……苦しいっ!! 苦しいのに……なにも考えられなくて……私っ……どうなっちゃうのっ……）

頭がボーっとする中での、かつてない悦楽に夢心地を感じていた。

陰核を剥いて吐息と舌技の波状攻撃に加えて、時には優しく歯を突き立てての強い刺激も与えたりと暇を与えない。

それが二度、三度と続いた頃に、紗友里が仰け反り始める。迫りくる臨界点に本能が備えているのだと、廣峯はすぐに思い至っていた。

それに合わせて廣峯の動きも変わる。

「オーガズムが近いんですね。じゃあ、こつちも責めちゃいますね」

「こつち：って、えっ!? ヤ、ヤダッ、こんな所を同時に責められたらっ!!」

「普通ですよ。んっ、ユリさんの膣内……温かいです……」

「ひやあああああっ!!」

クンニをしながら、暇を持て余した指で陰唇を弄る。後に行うセックスの為に、指で孔を解しているのだ。

紗友里からすれば、陰核と陰唇を同時に責められて四苦八苦である。

「ああああっ、指がっ、入ってるっ……んんんっ、掻き回されてるうっ!!」

「痛かったら、言って下さいね」

「い、痛くない……全然……それよりも……」

「気持ち良いですか？」

「は、はい。あひいつ、あああああつ、舐められてる所も、めちや気持ち良いつ、どっちも気持ち良くて……頭が可笑しくなっちゃうううっ!!」

もう嬌声も憚らない。マスク越しに聞こえる喘ぎは、蠱惑の嘆きだった。

性的快感を受け入れた途端に、まるで火蓋を切ったように、蛇口が開きっ放しなのだ。心身の垢が抜けていくような爽快感が紗友里の全身を蝕んでいた。

秘部はヒクヒクと胎動しており、クリトリスがピンと勃起する。そこへと再度甘噛みすると、今度こそ紗友里は壊れた機械のように、ガタガタと打ち震えては断末魔の如き叫びを見せた。

「ああああつ、あつ、あああつ……」

「盛大にイキましたね」

「こんな、気持ち良いものが……あつたなんて……」

「まだまだ序の口ですよ」

少し愛液を掻き出した所で臭い立つ。いまや十年以上と使われていない内部は、お世辞にもクリアな臭いとは言い難い。平常時であれば鼻が曲がるような臭いだ。しかし、廣峯も興奮する最中にあり、紗友里の女臭すら興奮の素因と成り得た。勃ちっ放しの股間から溢れる我慢汁がベッドのシーツを穢している。

これ以上は、廣峯も我慢が限界だった。

「ユリさん。そろそろ本番を……僕を気持ち良くさせて下さい」

「……分かりました」

痺れを切らした廣峯の本能が呻っている。上向くペニスがビクビクと胎動して我慢汁を零している。鮮度に満ちた人妻の肉体を、早急に穢したい一心と言った様子だった。

廣峯は、見せつけるようにペニスを紗友里へと差し出して見せる。

「セックスしたくて仕方がないです。カメラやライトを調整するのでユリさんはその間に、こちらで仰向けになってくれませんか？」

「ふ、ふわ……」

「あの、聞いてますか？」

「ふえっ!? ごめんなさい、なんですかつ!?」

「セックスの画を撮りたいので仰向けをお願いします」

「は、はい……!!」

紗友里の眼が見開いている。肉棒に目が釘付けだった。

廣峯の大きさに息を呑む。自分の知る肉棒とは、まるでサイズが異なるのだ。

（な、なに、この大きさ……夫のは、もっと小さいのにつ!! こ、これ……

ヒトに入るサイズなの!? やだ、怖い……は、入る訳ないっ!!）

旦那より二倍は大きい廣峯の肉棒。圧倒的な迫力に、紗友里の胸は穏やかではない。今更に断る勇氣は当然ながら無く、不安に駆られて指示通りにベッドへと仰向けになった。

「んっ、はあ、はあ……ほ、本当に入るんでしょうか……？」

「大丈夫ですよ。ちゃんとゴムも付けるので安心して下さいね」

「はあ、はあ……ううっ……!! ああああああっ!!」

「本当に処女みたいな反応だな……俺も、童貞みたいに興奮してるけど」

「ひゃあああああっ!!」

指先で通路を確保すると、すぐさま入口へと亀頭を宛がう。挟じ開けるように、肉棒で肉窟を穿り上げる。慣れない感覚に、紗友里がすぐに全身を強張らせる。その度に「落ち着いて、落ち着いて深呼吸を」と、廣峯が宥めた。

なんとか亀頭が入った後は、多少の強引でズリズリと奥まで侵入させていく。前戯は十分であり、痛みは全く無かった。

「んんんんんっ!!」

「全て入りましたよっ……」

「う、あ、あっ……ほ、本当につ!? ぜ、全然痛くない……」

「当然ですよ。ちゃんと前戯したんですから。気持ち良いでしょ？」

「ん……は、はい。快感が全身に広がってきます……」

「いままでこんな経験は無いですか？」

「ん……」

根元までの侵入を許すと、紗友里が大きく息を吐いた。

そして廣峯の質問に黙って頷く。旦那との思い出は「痛い」しかなかった。

「ゆっくり動きますね」

「うあああつ、す、凄いつ、んくううつ、う、動いてるっ!!」

「ユリさんも良い動きしてくれますね。すつごく気持ち良いですよっ!!」

「あああああつ、私も気持ち良いっ……こんなに気持ち良いの、初めてです!!」

「ユリさんの旦那さんは、どんな感じだったんですか？」

「……………」

「まあ、言わなくて全然良いですけど」

「んっ……………雑でした」

「ほう？」

「はあ、はあ、はあ……峰岸さんみたいに、や、優しく無かったです……もつと乱暴で……壊れるんじゃないかってくらいに痛くて……それがトラウマになって、セックスレスに……いま思えば、本当に信じられませんでした……」

「そうですか……」

「ううっ、こ、これは絶対に内緒ですからねっ!」

「勿論です。腰を折ってすいません。続き、行きますよ」

「は、はいっ!!」

紗友里にも思う所があり、口を開けば旦那への愚痴が零れ出す。童貞を必死に隠しては、AVで学んだ技術で先導した結果がコレなのだ。

今回の一件で紗友里は、旦那の無能さを痛感していた。

反対に、廣峯への評価がグングンと上がっている。女性を優しく扱う紳士的なイメージが付き纏い、シャワーの段階から既に廣峯を見る目が変わっていた。

正しく、恋にも等しい感情だった。

それは廣峯も察知している。だからこそ、話の腰を折って抽送を再開したのだ。人妻との撮影にはトラブルが多い。堅実に商売を進めたい廣峯にとって恋愛の感情は邪魔でしかないのであった。

紗友里も、それを察したように言葉を失くして行為に集中し始めた。

『その気になれば、紗友里を寝取れるかもしれない』

そう感じつつも、それは廣峯の目指す所でなく、飽くまで行うのは疑似恋愛だ。互いに、想いは内へと秘めて行為に馳せるのだった。

（職場の先輩に告白されたのが、全ての始まりなのよね。断り方が分からなくて、そのまま付き合った。一年後にプロポーズをしてきた時は、心から驚いたものよ。悪い人じゃなかったし、私もOKしちゃったんだけど……結局私は恋を知らずに結婚しちゃったのよね。恋を知らずに生涯を終えると思っていたけど、なんだかさつきから峰岸さんを見てるだけで……峰岸さんに視られてるだけで胸が苦しい。すつごくドキドキしちゃってる……これが恋なのかも……あああ、す、好き……峰岸さんっ……好き……）

恋愛を経験せずに大人へと成長した紗友里は、正にチヨロインだった。

官能的な雰囲気呑まれた影響もあるだろう。一度好意を認めた途端に、もう頭は一色に染まってしまふ。廣峯が仕事仲間から、片思いの相手へと昇格すると、急激に脳汁が噴き出し始めてしまい、そのまま快楽の荒波に呑まれていった。

「ふああああっ、ああああっ、ああああっ、声っ、漏れちゃうっ、私いま絶対変な顔してる……み、峰岸さんに視られるの、恥ずかしいっ、恥ずかしいよおっ、なのに、恥ずかしいのにつ、余計に気持ち良くなってきてるうっ!!」

「良いですね。マスクで顔が隠れてるのが残念です。ユリさんの、快楽に善がる表情が見たかったです。マスク姿も、可愛いから全然良しですけどねっ!!」

「ああああっ、峰岸さんっ……んんんんんっ!!」

廣峯の一突きがGスポットを抉り、クリトリスが痙攣を繰り返す。背中を仰け反らせて法楽を嘆き、ブリッジのような体勢の儘に溢れた脳汁が紗友里の理性を洗い流していく。

（峰岸さんに一目惚れしちゃったんだ……遅しくて格好良くて優しい峰岸さんに。私を救ってくれた恩人だもの。好きになって当然よね。でも、だからって私には、どうすることも出来ない……出来るとすれば、この時間だけでも幸せに浸ることくらいかしら……今日だけなら、良いわよね？ 峰岸さんを好きに……大好きになっちゃってもっ……!!）

「んひひひひっ!? ひああああっ、あああああっ、み、峰岸さんっ……も、もっと強くても、だ、大丈夫ですっ……も、もっと私を……めちやくちやしちやって下さいいっ!!」

「実は僕もうイキそうなんです。これ以上早くしたら、もう出ちやうっ……」

「はあ、はあっ……み、峰岸さんも、一緒にイキましようっ!!」

「ゴム付けてるんで……このまま出して良いですか？」

「だ、出して、下さいっ……お、お願い、します……」

「では、行きますっ!! はあ、はあ、はあっ!!」

「あひひひひっ、んんんんんんっ!! ああああああああっ!!」

ドクッ、ドクッ、ドクッ……!!

最後は二人して天井を見上げて果てた。

コンドームのタンクに、どんどんと精液が溜まっていく。シャワールームから既に射精寸前にあった廣峯である。溜めに溜めた精液が一気に放出されていく。ゴム越しでも明らかに伝わる精液の滾りに、紗友里は何度もビクビクと下腹部を震わせた。

ベッドをガタガタと揺らして快感を露わにする。

「あああああつ、あ、熱いつ、お腹つ、熱いいつ!!」

「はあ、はあ、はあつ……」

仰け反った後に、廣峯が逆に前屈みになる。最後の一滴まで精液をタンクへと注ぎ込むたい一心だった。

「あつ……」

暫くして静かに肉棒を引き抜く。息を吐きながら、廣峯が余韻に浸る。肉棒の感触を失った紗友里は、呼吸を整えるのも忘れて戸惑っていた。

あれだけ絶頂を繰り返したにも拘わらず、紗友里は早速と寂しさを覚えている。それを余所に、廣峯はコンドームを外してカメラを手取る。喪失感に苛まれる紗友里をアップで撮り、そこで撮影は終了するのだった。

六

「良い画が撮れました。今日は本当に、ありがとうございました」
「いえ……」

その後も、目ぼしい撮れ高が多く続いていた。

セックスシーンが終わり、それから情熱的なキスシーンを挟み込むと、続いてお掃除フェラのシーンへと移った。

予想し得た事実として、紗友里はフェラチオが初めてだった。

他者に配慮する余裕の無い童貞が旦那なら、仕方のない話である。撮影の中で指導を交えながら、紗友里にフェラチオを叩き込む。旦那では無い者のペニスを健気に貪るシチュエーションが廣峯には受けられしく、フェラのシーンだけでも二連発の画を撮っていた。

予定していたプレイを全て終わると、締めとして二人は再び仲良くシャワーを浴びるのだった。

身支度を整えると、廣峯はベッドに腰掛ける紗友里の隣へと座る。手が触れた為に、紗友里は思い切って廣峯の手を握った。

幸せなひと時を、まだ終わらせたくない言わんばかりに――

（まだ、一緒に居たい……峰岸さんと……）

とうに時刻は夜更けである。旦那の所在を考えると、僅かに胸が苦しくなるも、紗友里はまだまだ想い人の廣峯と一緒に居たかった。

しかし、無情にも廣峯の事務的な挨拶は続き、遂には別れの時間に迫っていた。廣峯が立ち上がる。別れの時間であり、同時に紗友里の心に喪失感が広がった。「では、この度は本当に有意義でした。珍しく僕も、めっちゃめっちゃ興奮しました。ありがとうございます、ユリさん」

「……………」

「ユリさん？」

「あ、あの……これは一回きりなのでしょうか……？」

「えっ？ これというのは、撮影会のことですか？」

「はい……」

紗友里は、自分で言って驚いていた。

まさか消極的な自分が、こんなことを言ってしまうなんて、と……

持ち前の内向性も、恋心を前には無意味のようだ。

気付けば紗友里は、廣峯に「次」の約束を取り付けようとしていた。

予めの契約としては、エッチな撮影会は一回きりとしている。

「まだ、その……借金が多いので十万円だけでは返せないんです」

「そう、ですよね」

「で、出来れば、その、定期的に撮影してほしい、です……」

これも、普段では有り得ない発言である。紗友里も言った後で恥ずかしくなり、ポツと顔が赤面して俯く。

「そう言ってくれて嬉しいですが。けど、正直に言うて厳しいかもしれません……たまに同じ女優を起用することもありますけど、そういうのは初回の売り上げが良い時に限っています」

「つまり、私の映像の売り上げが良くないと駄目なのでしょうか？」

「はい。申し訳ないです。一応商売ですので」

「……………」

「一定の売り上げに達した時はご連絡致します。その時にユリさんさえ良ければ、お声掛けしますので、また宜しくお願いします」

「分かりました……」

そうして今回の撮影はお開きとなった。

体の良い言葉回しで紗友里を納得させたものの、結局と廣峯は一人に縛られず、色々な女性とエッチがしたいだけなのだ。

それ故に専属のAV女優は居らず、販売する映像はそれぞれが違う女性だった。だが、映像が爆売れした場合に限り、たまに同じ女優に声を掛けたりもする。

けれど、それは低い確率であり、そもそも四十歳に近い女性では不可能だろうと、この時の廣峯は確信していた。

しかし、その予想も反して紗友里のAVは後に、かつてない大ヒットを見せる。今日限りの付き合いと思った廣峯であるも、二人の関係は正にこれから始まるのだった。